様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年 　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３４５０９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３７０２４８

研究課題名（和文）中世楽書の生成と秘伝の相承ならびに楽書の基礎的研究

研究課題名（英文）The Origin of Medieval Gakusho, Inheritance of Gagaku Secrets, and Basic Research on Gakusho

研究代表者
中原　香苗（NAKAHARA, KANAE）

神戸学院大学・経営学部・准教授

研究者番号：８０４６９２７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：楽書についての研究と、音楽に関連する資料についての研究を行った。まず、楽書については春日大社寄託の楽書断簡二葉についての論文をまとめ、鎌倉期成立の『掌中要録』の書写について検討した。加えて、鎌倉期成立の『文机談』の秘曲伝授説話に着目して、この説話に当時の音楽をめぐる状況が反映されていることを明らかにした。
　音楽に関わる資料としては、仏教儀式で演奏される『音楽講式』の断簡を紹介した。また音楽法会をともなう場面を有する大阪府堺市所在の堺長谷寺蔵の長谷寺縁起を調査して報告書としてまとめ、同寺の縁起関連資料について考察した。

研究成果の概要（英文）：A series of studies was conducted on gakusho, the records related to traditional Japanese court music(gagaku), and on the documents related to gagaku,several research papers and a report were published as follows;
Two detached sections from the original gakusho which are kept in Kasuga Taisha shrine were introduced and examined. The manuscripts of Shochu-Yoroku written in Kamakura period were considered. A study on a tale about the ritual of teaching gagaku secrets in Bunki-dan written in late Kamakura period was also conducted and examined focusing on how the actual situation of the musicians was reflected. About documents related to gagaku, a section of Ongaku Koshiki performed in Buddhist ritual was introduced. Research on Hasedera-Engi owned by Sakai Hasedera in Sakai city, Osaka prefecture, was conducted and reported in a book. Several documents related to Hasedera-Engi were considered and reported.

研究分野：　説話集や楽書などに見られる音楽に関わる伝承や、楽書それ自体の研究

キーワード：楽書　日本音楽史　春日楽書　掌中要録　音楽講式　秘曲伝授　寺社縁起

1．研究開始当初の背景

近年、音楽をめぐる研究は活況を呈しているといえる。国文学の立場から磯水絵『『源氏物語』時代の音楽研究』(笠間書院、2008)、国史学の立場からは三島暁子『天皇・将軍・地下楽人の室町音楽史』(思文閣出版、2012)豊永聡美『古代中世の天皇と音楽』(吉川弘文館、2006)が上梓され、音楽史学からは福島和夫『日本音楽史叢』(和泉書院、2007)が公刊されるなど、多方面から音楽に着目した研究が発表されている。

音楽方面の研究を志すとき、もっとも注目すべきは、音楽を専業とした楽人によって編まれた楽書であろう。いわゆる四大楽書とされる鎌倉時代成立の『教訓抄』『続教訓抄』、室町時代の『體源鈔』、江戸時代の『楽家録』のほか、正続『群書類従』管絃部に収められたものが知られている。

これらの楽書のうち、特に中世に成立したものに着目すると、狛氏とその周辺で編まれた楽書が多いことに気づかされる。狛氏は、南都興福寺に属した楽人で、宮廷では左方楽所に所属していた。狛氏によって著された楽書として、狛近真『教訓抄』、その孫の狛朝葛の『続教訓抄』のほか、春日大社に所蔵される「春日楽書」、近真筆〔羅陵王舞譜〕、朝葛書写『掌中要録』、狛正葛『竹舞眼集』等がある。

狛氏の周辺では、特に近真の前後の鎌倉時代初期から室町時代にかけて、「狛系楽書群」とも総称される多くの楽書が編まれた。そのうち、前掲の「春日楽書」と称される楽書群は特に重要である。「春日楽書」は、『楽所補任』二巻とともに伝存し、『高麗曲』『輪台詠唱歌外楽記』『舞楽古記』『舞楽手記』『楽記』のあわせて五巻が伝わっている。いずれも鎌倉期の書写になるもので、原本が春日大社に所蔵されている。これら「春日楽書」中の楽書についても、近年研究が進められつつある。「春日楽書」中の楽書が、狛氏において大きな意味をもっていたと考えるならば、これらについての研究はさらに推進されるべきであろう。

ただし、こうした状況にあっても個々の楽書に関する研究は進んでいるとはいえない。さきに書名を挙げたものの中では、注釈を付されているのは『教訓抄』のみで、これについては伝本研究も進められ、研究の基礎となる重要な伝本も紹介されつつある。狛氏周辺の楽書に限らず、そのほかの楽書については伝本研究などの基礎研究すら十分でない。それぞれの楽書についての研究を進めていく必要があろう。

また、全国の寺社や文庫、図書館などにはいまだ紹介されていない楽書や音楽に関する資料が多数存在すると思われる。現在までに知られている楽書について考究するとともに、音楽に関わる資料を探索することも必要であり、探索の結果見いだされた資料についても検討がなされるべきであろう。

また、楽書などに記される音楽にまつわる伝承には、当時の音楽を巡る状況を反映したものが少なくない。そうした伝承にも目を向け、考察を加えるべきである。

2．研究の目的

（1）狛氏周辺で成立した楽書に関する研究

①楽書断簡の研究

近年、春日大社に鎌倉期のものと思われる断簡二葉が寄託された。本断簡は、「春日楽書」中の楽書との関連がうかがわれる。春日大社蔵の「春日楽書」には欠失部分がまま存するが、この断簡二葉は、その欠失部分の一部であるとみられる。これらの断簡と「春日楽書」中の楽書との関連を検討して、それが「春日楽書」中の楽書のどの部分にあたるのかを明らかにし、断簡の出現がどのような意味をもつのかについて考える。

②『掌中要録』の研究

江戸初期に書写された「春日楽書」の写本に、『掌中要録』という楽書が存する。本書は、舞楽の楽譜（舞譜）を集成したもので、鎌倉時代後期の弘長三年(1263)に『続教訓抄』の著者狛朝葛が書写した、との識語をもち、『続群書類従』にも収められている。舞譜としては古い部類に属し、三十曲以上もの楽譜が収載されており、当時の狛氏に伝えられていた舞楽が、どのようなものであったかを具体的に知ることができる重要なものといえる。しかしながら、本書についてはいまだ研究が進んでいない。

本研究では、『掌中要録』研究の一環として江戸城紅葉山文庫に収められた二種の写本に着目し、その書写の経緯について考える。

（2）個別の楽書の研究

金剛寺蔵『諸打物譜』について

大阪府河内長野市の古刹天野山金剛寺聖教中には、音楽に関する資料が存する。そのうち、南北朝期の金剛寺学頭である禅恵（1284―1364）が文保二年（1318）に書写した『諸打物譜』について検討する。本書は、雅楽の演奏で用いられる打楽器である「打物」の楽譜や演奏にまつわる口伝などのほか、演奏に用いられる楽器の名器に関する記述など、多様な内容をもつ興味深いものである。

この楽書の内容は、研究代表者がすでに紹介しているが（「金剛寺聖教中の音楽資料について」(『真言密教寺院に伝わる典籍の学際的調査・研究―金剛寺本を中心に―』、2011)、本研究では視点を書写者である禅恵にすえ、禅恵と他の寺社や書籍の伝来という観点から検討することとする。

（3）秘曲伝授説話に関する研究

本研究では、「本朝琵琶の祖」とされる藤原貞敏が唐の廉承武から秘曲を伝授されたという説話を取り上げ、そこに記される「礼

物」に着目し、秘曲を授ける側である楽人の状況との関連などについて考察する。

（4）音楽に関連する資料についての研究
①『音楽講式』断簡の研究
「講式」は、寺院での仏教法会で演奏されるものである。多くの講式は仏や高僧などを讃えるが、『音楽講式』は、音楽をもって成仏することを願うという、特異な性格をもっている。本講式は、琵琶西流の当主で鎌倉時代初期の楽人藤原孝道が発案したもので、十二世紀末に成立したと考えられている。『平家物語』延慶本・長門本や『源平盛衰記』、早歌「管絃曲」や楽書『続教訓抄』にも引用されるなど、様々な分野のものに影響を与えている。
伝本としては、これまで高野山大学寄託金剛三昧院蔵本と大原勝林院蔵『魚山叢書』所収本の二本が知られるのみであったが、研究代表者架蔵の古筆切が『音楽講式』の一部だと思われるので、この断簡と本講式との関連について考える。

②堺長谷寺関連資料についての研究
音楽関連の資料を探索する過程で、大阪府堺市所在の長谷寺（堺長谷寺）において、音楽をともなう法会の場面をもつ縁起絵巻と、奈良県桜井市の長谷寺（大和長谷寺）の縁起絵巻を見出した。堺長谷寺の縁起関連資料は、堺市立中央図書館にも所蔵されるが、これらの資料をあわせて検討する。

３．研究の方法
（1）狛氏周辺で成立した楽書に関する研究
①楽書断簡の研究
春日大社に寄託されている断簡二葉について検討する。両断簡と「春日楽書」中の楽書の内容とを比較し、本断簡の位置づけをおこなう。

②『掌中要録』の研究
江戸城紅葉山文庫を管理していた書物奉行の執務日記である『幕府書物方日記』の叙述をもとに、紅葉山文庫に収蔵されていた『掌中要録』の二種の伝本の書写の経緯を考察する。

（2）個別の楽書についての研究
天野山金剛寺蔵の楽書『諸打物譜』の記事を検討し、本書の書写者禅恵と他の寺社などとの関係を考える。

（3）秘曲伝授説話に関する研究
鎌倉時代後期成立の『文机談』に記される唐の廉承武から藤原貞敏への秘曲伝授説話と、その類話や秘曲伝授について言及した楽書の記述とを比較することで、本説話における「礼物」と秘曲を授ける楽人の意識を探る。

（4）音楽に関連する資料についての研究
①『音楽講式』断簡の研究
架蔵の断簡と『音楽講式』の二つの伝本の本文とを比較し、断簡が講式のどの箇所にあたるかを特定し、その位置づけを考える。

②堺長谷寺関連資料についての研究
堺長谷寺に所蔵される資料及び堺市立中央図書館蔵の堺長谷寺の縁起に関する資料について調査し、その結果を報告する。加えて、堺長谷寺の縁起に関わる資料について考察を加える。

４．研究成果
（1）狛氏周辺で成立した楽書に関する研究
①楽書断簡の研究
春日大社に寄託されている鎌倉期書写と思われる楽書断簡二葉の検討を行った。これらはともに巻子本からはがれたものであるが、春日大社に所蔵される鎌倉期書写の「春日楽書」の一部であることが判明した。一葉は天仁元年（1108）～弘長二年（1262）にいたるまでの楽人の補任を記録した上下二巻から成る『楽所補任』の上巻末尾近く、もう一葉は、舞楽曲「羅陵王」の楽譜を中心に記した『舞楽手記』の現存箇所冒頭の直前に位置する部分であることが判明した。
この二葉分の内容は、これまで「春日楽書」の江戸期の写本により類推可能ではあったが、たとえば誤写かと思われる箇所があった場合、それがもともと存在したものか、あるいは書写の段階で生じたものかの判断はできなかった。本断簡の出現により、そうした場合にも原本で内容が確認でき、誤写か否かなどの特定が可能になった。両断簡により、『楽所補任』『舞楽手記』の欠脱部分の一部が明らかになったことは、今後の「春日楽書」研究に資するところ大であるといえる。

②『掌中要録』の研究
江戸幕府の文庫であった紅葉山文庫には、二種の『掌中要録』の写本が収められていた。両者は、現在国立公文書館内閣文庫に蔵されている。一方は、寛文六年（1666）の奥書をもつ、「春日楽書」の写本である『楽書部類』の一部であり（寛文本）、他方は元文五年（1740）に書写されたもの（元文本）である。
八代将軍徳川吉宗の時代に、寛文本が欠巻や錯簡等の不備が存するものであることが明らかになった。そのため、京都の楽人から欠脱等のない写本を取り寄せて書写したのが元文本である。本研究では、『幕府書物方日記』を手がかりに元文本書写の経緯を検討した。
その結果、『掌中要録』は紅葉山文庫に収められるべき価値を認められたものであり、その書写は、江戸幕府での楽書の収集・書写・収蔵と関わっていることが明らかになった。
本研究は、江戸幕府において楽書がどのような評価を得、またどのような経緯を経て文

庫に収蔵されるかについて考察したものだが、江戸幕府における楽書の享受と文庫収蔵の実態を明らかにした点で意義あるものといえる。

（２）個別の楽書についての研究

天野山金剛寺蔵『諸打物譜』について検討した。先行研究により、本書の書写者禅恵が東大寺東南院や根来寺と関わりを持ち、そこから金剛寺に典籍をもたらしたことが明らかにされているが、『諸打物譜』からは、それとは異なる方面との関わりがうかがえる。

本書には住吉社の口伝や南都の信貴山や興福寺に関わる記述が見いだされ、禅恵はそうした寺社などから音楽に関わる知識や書物を得ていたと推察されるのである。

音楽方面の記述に着目することで、これまで知られていたものとは異なる、禅恵と住吉社や信貴山、興福寺との関わり、ひいては金剛寺とそれらとの関わりをうかがうことができた。

本研究は、楽書の分析から寺院聖教の形成に関わる問題を指摘し得た点、貴重であるといえる。

（３）秘曲伝授説話に関する研究

本研究では、説話を多く用いて琵琶道史を叙述する鎌倉時代後期成立の『文机談』に記される、「本朝琵琶の祖」とされる藤原貞敏が唐の廉承武から秘曲を伝授されたという説話に着目した。琵琶の秘曲伝授は平安時代末期から室町時代まで行われていたが、この説話は秘曲伝授の始原に位置づけられる。本話では、なかなか伝授を受けられずにいた貞敏が、廉承武に「礼物」すなわち謝礼として砂金を送ったところ、伝授を受けることができたと述べられている。ここには、天皇や貴族などに対して実際に秘曲伝授の儀式を行う側の楽人の意識が反映されているのではないかと思われる。

楽人にとって伝授の儀式の際に受け取る謝礼は、自らの生活に直結するものであったと推察される。貞敏の説話は、秘曲伝授の起源であるとともに、その儀式では、始原の段階から「礼物」が不可欠であったことを示唆するものとなっている。秘曲伝授には「礼物」が必須であることを明確にしておくことで、伝授する側の楽人は、「礼物」という名目で、受者からしかるべき報酬を確実に得ることが期待できたと思われる。つまり、秘曲伝受の始原に位置づけられるこの説話からは、秘曲を授けて報酬を得る楽人側の本音が透けて見えるのである。

秘曲伝授の始まりを物語る説話の中に、実際の儀式に携わる楽人側の意識が組み込まれていることを指摘した点、音楽説話研究の面から価値のあることといえる。

（３）音楽に関連する資料についての研究

①『音楽講式』断簡についての研究

研究代表者架蔵の鎌倉時代末期頃の書写かとみられる古筆切が『音楽講式』の断簡であることを指摘した。本断簡は、伝本の少ない『音楽講式』にあって貴重と思われるので、影印を付して翻刻し、内容について検討した。

本断簡と前掲の二伝本の本文とを比較すると、金剛三昧院蔵本と一致することが判明した。一方で、当該断簡には両伝本には存在する、法会で実際に読むための傍訓・送り仮名・返点の類が一切見えないことから、それらとは異なり、実用に供するための目的ではなく、仏閣や神社への奉納、あるいはほかの何らかの目的で書写されたものかと推察される。

本断簡は、120 行に及ぶ講式本文のうちのわずか５行のものではあるが、これまで知られていた二本のほかにも伝本が存在したことを知らしめるものであり、『音楽講式』の享受を考えるうえでも意義あるものといえる。

②堺長谷寺に関連する資料についての研究

大阪府堺市に所在する長谷寺（堺長谷寺）には、当寺の縁起を記した絵巻のほか奈良県桜井市の長谷寺（大和長谷寺）の縁起絵巻が所蔵されている。

本研究では、堺長谷寺の縁起に関わる「長谷寺絵図（写真）」「泉堺長谷寺略縁起」（ともに堺市立中央図書館蔵）と堺長谷寺蔵『泉州堺長谷寺縁起』、大和『長谷寺縁起絵巻』の調査を行い、略解題を付して影印と翻刻を掲載し、『堺長谷寺　縁起関連資料　調査報告書』にまとめた。

また、堺長谷寺の縁起に関わる「長谷寺絵図」「泉堺長谷寺略縁起」と堺長谷寺蔵『泉州堺長谷寺縁起』の内容を検討し、考察を加えた。

その結果、近世の寺社の縁起がどのように作られ、変遷していくかの様相を具体的に示すことができた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 中原香苗、堺長谷寺の縁起について、詞林、査読無、59、pp33―52、2016

② 中原香苗、『文机談』藤原貞敏の秘曲伝授説話をめぐって―国史には二百両、口伝には三百両―、日本文学、査読有、64 巻 10 号、pp72―76、2015

③ 中原香苗、〔資料〕伝後二条天皇筆『音楽講式』断簡、神戸学院大学経営学論集、査読無、第 10 巻第 1・2 号、pp1-5、2014

④ 中原香苗、〔資料紹介〕「春日楽書」断簡二葉について、語文、査読有、100・101 輯、pp127-138、2013

〔学会発表〕（計１件）

① 中原香苗、金剛寺所蔵の音楽資料、仏教と文学―日本金剛寺仏教典籍調査研究成果報告国際学術シンポジウム―、2014 年 10 月 25 日、中国人民大学・北京（中国）

〔図書〕（計２件）
① 中原香苗、堺長谷寺所蔵　縁起関係資料報告書、2015、154）
② 中原香苗（神戸説話研究会編集）、和泉書院、中世・近世説話と説話集、2014、509（pp363-389）

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
中原　香苗（NAKAHARA　KANAE）
神戸学院大学・経営学部・准教授
研究者番号：８０４６９２７０

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
なし